Ⅰ聖書

第一章　　聖書について

1節　　神の自己啓示

1－①　本性の光と、創造および摂理の御業は、神の慈しみと知恵と力を、人間が言い逃れできないほどに明らかにしている。

「律法を持たない異邦人が、生まれつきのままで律法の命じる行いをする場合は、律法を持たなくても、自分自身が自分に対する律法なのです。彼らはこのようにして、律法の命じる行いが彼らの心に書かれていることを示しています。彼らの良心もいっしょになってあかしし、また、彼らの思いは互いに責め合ったり、弁明しあったりしています。」　㊖

ローマの信徒への手紙２・14、15

※律法を持っていなくても善悪を判断する良心が、律法と同じ役割を果たす。（脚注）

「神について知りうる事柄は、彼らにも明らかだからです。神がそれを示されたのです。世界が造られたときから、目に見えない神の性質、神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して神を知ることができます。従って彼

らに弁解の余地がありません。」　㊥

ローマへの信徒への手紙１・19、20

※神の霊的本質は、神によって創造された自然界や人間の良心よって知ることができる。したがって、神を知らないという弁解は許されない。

(脚注)

※カルヴァンは、ローマ１・１９の聖句について次のように言う。

「目に見えない神性はこれらの鏡に映し出された光景によって示されはするが、我々の目は神の内的啓示によらなければ―つまり、信仰によって照らされるのでなければ―悟ることはできない。またパウロが＜神について知るべきことは世界の創造において示されている＞と告げるとき（ローマ１・１９）、この現われは人間の悟りによって理解されると言おうとしたのでなく、それどころか、これは人々に言い逃れの余地を与えないため以外の何ものでもないと説くのである。」（綱要)1－5－14

「天は神の栄光を語り告げ

大空は御手のわざを告げ知らせる。

昼は昼へ、話を伝え、

夜は夜へ、知識を示す。

話もなく、言葉もなく、

その声も聞かれない。」㊙

詩篇 19・1－3

※「天と大空は空間の軸、昼と夜は時間の軸を表す。」（略解）　すなわ

ち、神は時間と空間、つまり歴史と自然において、創造と摂理の御業を現しておられる。

「彼らは、そのようなことを行えば、死罪に当たるという神の定めを知っていながら、それを行っているだけでなく、それを行なう者に心から同意しているのです。」㊙改

ローマへの信徒への手紙 1・32

「ですから、全て他人を裁く人よ。あなたに弁解の余地はありません。あなたは、他人を裁くことによって、自分自身を罪に定めています。さばくあなたが、それと同じことを行っているからです。」㊙改

ローマへの信徒への手紙 2・1

※カルヴァンは、我々の知恵というものが、神を認識することと自分自身を認識することとの二つの部分から成り立っているとして、我々が神を知ろうと欲することは、この二つの知恵によってであるとする。

「先ず我々がその内に生きかつ動く神（使途 17・28)、この神への瞑想に己が思いを真っ直ぐに向けない限り、誰一人自分自身について考察することはできない。なぜなら、我々の力の由来する賜物のどれ一つとして己自身からのものでないことは明らかであるのみか、われわれがこうして生きている生存自体が一人の神において成り立っている以外の何ものでもないからである。・・・・・人間の内にはいわば悲惨に満ちた世界が見られ、更に我々は神の装わせたもうた飾りを剥ぎ取られているので、裸の恥を曝し、極まりない汚辱の堆積物を露わにするとともに、他方、自分自身の不幸についての意識が我々一人一人を駆り

立てて、神について少なくとも何らかのことを知ろうとせずにおられなくする」(綱要)1-1-1。　また、神の現臨を実感するとき、我々自身が誇っている自分の義と知恵と力がいかに惨めなものかを認識するとして次のように言う。

「一旦思いを神に向け、神がいかなる御方であり、我々が規範としなければならない神の義と知恵と力の完全さがいかに厳格なものであるかを考え始めるならば、先に義の偽りの装いのもとに我々に微笑みかけていたものは、たちまち不正の極みとして、忌まわしく思われ、知恵の名目のもとに奇怪にも我々を欺いていたものは、極端な愚劣と感じられるようになり、力の仮面のもとに自己を誇示していたものは、最も惨めな無力に過ぎないことが露わになる。・・・・・聖書は到るところで、昔の聖徒らが神の現臨を実感したときはいつも衝撃を受け、また打ち砕かれたと述べているが、この恐れと驚きとは上記のことに由来する。」(綱要)1-1-2,3

1－②　本性の光と創造および摂理の御業は、救いに必要な、神とその御心についての知識を与えるのに十分ではない。

「世は自分の知恵で神を知ることができませんでした。それは神の知恵にかなっています。そこで神は、宣教という愚かな手段によって信じる者を救おうと、お考えになったのです。」　㊥

コリントの信徒への手紙　一　　1・21

「この賜物について話すには、人の知恵に教えられたことばを用いず、御霊に教えられたことばを用います。その御霊のことばをもって御霊のことを解くのです。生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。それらは彼には愚かなことだからです。また、それを悟ることができません。なぜ

なら、御霊のことは御霊によってわきまえるものだからです。」　㊖

コリント人への手紙　第一　2・13、14

※生まれながらの人間は、神の御言葉を聞くことによって、救いに必要な神とその御旨についての知識を得ることができる。神の御言葉を聞かないと、人間は救われない。

1－③　それゆえに主は、いろいろなときに、さまざまな方法で、御自身を啓示し、その彼の御心を彼の教会に対して明示することをよしとされた。

「神は、かつて預言者たちによって、多くの形で、また多くの仕方で先祖に語られた。」　㊐

ヘブライ人への手紙１・１

※旧約時代では、律法、儀式、種々の制度、士師たち、王たち、預言者たちを通して、神の啓示が示された。（脚注）

※「神が父祖たちに直接の託宣や幻によって知らせたもうたにせよ、あるいは以後の世代に手から手に伝承されるものを、人間の働きと務めを用いて勧告したもうたにせよ、人々の心に教理の確乎たる確かさが刻み込まれ、彼らもこれによって自らの学んだことが神から来たと確信し、また理解したのは疑いない。なぜなら、神は常に御言葉にあらゆる人間的臆見を遥かに越える疑いなき信頼が寄せられるように、これを確かなものとされたからである。」（綱要）1－6－2

1－④　後になって、その啓示された御心をすべて文書にゆだねることをよしとされた。それは、真理をよりよく保存し広めること、肉の腐敗とサタンおよびこの世の悪意とに対抗して、教会を一層確立し慰めるためである。

「あなたが主に信頼する者となるように
今日、あなたに教えをあたえよう。
わたしの意見と知識に従って三十句
あなたのために書きつけようではないか。
真理とまことの言葉をあなたに知らせるために
まことの言葉をあなたの使者に持ち帰らせよう。」　㊥

箴言 22・19－21

※「知恵の教師たちはイスラエル的伝統の範囲内で活動したのではなかった。最近の半世紀以上にわたる研究が明らかにしてきたように、イスラエルの知恵は、最初期から古代オリエント世界の教養層に共通する基盤の上で活動していたのである。知恵の世界の国際性については・・・・・1923 年に古代エジプトの知恵文学（アメンエムオペトの教訓）が発表されて以来、もはや論争の余地のないものとなった。」（略解）この証拠聖句の箇所は、「（アメンエムオペトの教訓）との間にほとんど堆語的な対応関係がみられることが指摘されている。・・・・・『三十句』は（アメンエムオペトの教訓）が、三十章から構成されていることから、ここを三十と読むべきであることが判明した。」（略解）

「敬愛するテオフィロさま、わたしもすべての事を初めから詳しく調べていますので、順序正しく書いてあなたに献呈するのがよいと思いました。お受けに

なった教えが確実なものであることを、よく分かっていただきたいのであります。」　㊥

ルカによる福音書 1・3, 4

「かつて書かれた事柄は、すべてわたしたちを教え導くためのものです。それでわたしたちは、聖書から忍耐と慰めを学んで希望を持ち続けることができるのです。」　㊥

ローマの信徒への手紙 15・4

「イエスは答えて言われた。『人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出るひとつひとつのことばによる』と書いてある。・・・・・

　イエスは言われた。『あなたの神である主を試みてはならない』とも書いてある。

　イエスは言われた。『引き下がれ、サタン。『あなたの神である主を拝み、主にだけ仕えよ』と書いてある。』」　㊨

マタイの福音書 4・4、７、10

「人々があなたがたに『霊媒や、さえずり、ささやく口寄せに尋ねよ』というとき、民は自分の神に尋ねなければならない。生きている者のために、死人に伺いを立てなければならないのか。おしえとあかしに尋ねなければならない。もし、このことばに従って語らなければ、その人に夜明けがない。」　㊨

イザヤ書 8・19, 20

※「おしえとあかし」は、イザヤに啓示された神のことば。（脚注）

※カルヴァンは、聖書の成立が神の意志であることを述べて、その成立のいきさつと、聖書の意義を次のように言う。

「神はこうして遂に、教えが途絶えることなく語り継がれ、真理があらゆる時代に世界のうちに存立するため、それまで父祖たちに託して来られた託宣が、いわば公の掲示板に記入されることを欲したもうた。・・・・・私は繰り返して、次のことをくれぐれも言っておく。聖書は、キリストを仲保者として立てるところの信仰と悔い改めの教えの他に、世界を創造しかつ支配される唯一の真実の神を確かな目印と印し付けによって称揚し、偽りの神々の群れと混同されることがないようにしている、と。そういうわけで、人は子の最も光彩に富んだ劇場の中に置かれてこれを見るようにされている以上、神の御業を思うべくその目を真剣に向けなければならないのであるが、さらによき益を受けるためには何をおいても耳を御言葉に傾けなければならない。・・・・・そこで、真実の宗教が我々を照らすためには、天上の教理から出発しなければならないこと、また、聖書の弟子になるのでなければ誰一人として聖なる教理の僅かの味わいも受けられないことを、固く心に留めなければならない。というのは、真の知性の発端は、神が御自身について証ししようとされたことを恭しく受け入れるところに現われ出るからである。」（綱要）1－6－2

1－⑤　前項（1－④）の目的が、聖書を最も必要とするものである。

「聖書はあなたに知恵を与えてキリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができるのです。」　㊙改

テモテへの手紙　第二　3・15

「私たちは、さらに確かな預言のみことばを持っています。夜明けとなって、明けの明星があなたがたの心の中に上がるまでは、暗いところを照らすともし

びとして、それに目を留めているとよいのです。」　㊙

ペテロの手紙　第二　1・19

※カルヴァンは、聖書の必要性について、次のように言う。

「聖書なしでは混乱し切っている神についての知識を、聖書は我々の精神のうちに纏め上げ、闇を吹き払って真の神をはっきり示すのである。したがって、神がその教会を教えるに当たって、物言わぬ教師たち（すなわち、神が我々のために創造したもうたその御業）を用いるだけでなく、冒すべからざる聖なる御口を開きたもうこと、また、何らかの神を拝まなければならないと公示するのみでなく、御自身を拝むべきであると宣言したもうこと、更に、選ばれた者に神を重んじねばならないと教えるに留まらず、御自身こそ重んずべき御方であると示したもうことは類なき賜物である。神は世の初めこのかた、一般的な物事を提示して教える他に御言葉を付け加え、この御言葉こそが、神を他のものと識別するためのより正しくより確実な目印となるという秩序を、教会のために立てておられた。」（綱要）1－6－1

1－⑥　神がその民に自らの御心を啓示された上述の以前の方法は、今では停止している。

「神は、むかし父祖たちに、預言者たちを通して、多くの部分に分け、また、いろいろな方法で語られましたが、この終わりの時には、御子によって、私たちに語られました。神は、御子を万物の相続者とし、また御子によって世界を造られました。」　㊙

ヘブル人への手紙　1・1,2

※一節全体は、神の自己啓示の方法、啓示論である。啓示論全体の中に聖書が位置づけられている（講解)。我々が神についての知識を得る方法は、自然啓示（一般啓示）と特別啓示と呼ばれる二つの方法によってである。聖書は特別啓示に属する。

1－①は、自然啓示について述べられており、「本性の光」とは、良心とか理性と呼ばれているものである。自然啓示は、創造されたままの人間に向けられている啓示だから、その中には人間の救いに必要な神とその御心についての知識は含まれていない。1－②以降は自然啓示に対して特別啓示と呼ばれるものである。特別啓示は、「創造者である神が、被造者である人間に啓示される自然啓示の場合と違って、神は救い主として、救いを必要としている罪人である人間に対して、ご自身を啓示し、御旨を宣言されたわけです。啓示の内容が創造啓示と救済啓示と違うように、啓示の受領者も、自然啓示は人間全部、そういう意味で一般啓示ですが、救いの啓示の場合は、旧約ではイスラエル、新約では教会（もちろん、これは代々にわたり、全世界に広がり、階級、貧富、性別、年齢の差別はありませんが、この世ではなく、教会）が、この啓示の受領者です。そういう意味で、救いの啓示は特別啓示です。」（講解）

昔の啓示方法（ヘブライ 1・1 を参照）は、新約以後はキリストにおいて完結しているのだから今では停止している。

「神がその独り子において語るという決定的な、最後的な啓示行為があったからには、これは一切の不完全な啓示を、このイエス・キリストにおいて完成し、それに終止符をうったのです。それまでの啓示の一切は、このイエス・キリストにある最終的な、究極的な啓示の完成、神の啓示そのものを指し示して

きたのです。・・・・・聖書は・・・昔の啓示に代わる、今の啓示方法なのです。聖書を手にする時、わたしたちは、旧約の民に、そしてイエスのご在世中に神が直接語られたように、今、この聖書を通して神が語られているのだと信じなければならないのです。」（講解）

「預言者たちは神の言葉をもたらしたにすぎないが、御子は、実際に、人間の形をとった神の言葉だった。・・・・・使徒たちがキリストにより彼の証人となるように選ばれたことは明らかだが、使徒たちはまた、キリストにおいて与えられた啓示を解釈し、宣べ伝えるように特別に聖霊を与えられたのである（ヨハネ 16・12, 15)。彼らの証しは、それ自体、神の言葉だった（Ｉテサロニケ 2・13)。そして、その証しが聖書の中に入れられて、キリスト一啓示は世界中にいきわたる。言い換えれば、聖書自体が、今や啓示なのである。」（註解）

岡田稔氏の（解説）では、この第一節で主張されている教理上の断定として、次の三つをあげる。

1. 自然啓示の不十分性。
2. 特別啓示の意図が、主として自然啓示の不十分な点を補足すること。
3. 聖書の必然性、特別啓示の完結性、完結した啓示としての聖書。